

伊勢物語新講

竹野長次著

竹野長次著

改訂

伊勢物語新講

東京
大学
書
林

昭和二十三年十二月二十日 印刷
昭和二十三年十二月三十日 第一版發行

改訂 伊勢物語新講

定價二百二十拾圓

著者

竹野長次

發行者

東京都文京區久堅町三十三番地
佐藤義人

印刷者

東京都中央區本橋町三丁目七番地
新井修平

發行所

大學書林

東京都文京區久堅町三十三番地

電話小石川(86)〇五〇九・五一九五
振替口座東京 四三七四〇番

印刷・電新堂／製本・岩淵

目次

本文	一
和歌索引	三九
伊勢物語について	三七

【一 段】

昔、男ありけり。うひかうぶりして、奈良のみやこ春日^{かすが}の里に、しるよしして、狩にい
きけり。その里に、いとなまめいたる女はらから住みけり。この男がいまみてけり。おも
ほえず、ふるさとにいとほしたなくてありければ、ここちまどひにけり。男著たりける狩^か
衣^{ぎぬ}の裾を切りて、歌を書きてやる。その男信夫摺りの狩衣をなむ著たりける。

春日野の若紫のすりごろもしのぶのみだれかぎり知られず。

となむ、おひつきていひやりける。ついでおもしろき事とや思ひけむ。

陸奥^{みちのく}の信夫もち摺り誰ゆるに亂れそめにしわれならなくに。

といふ歌の心ばへなり。むかし人はかくいちはやきみやびをなむしける。

【語釋】

○うひかうぶり。元服のこと。即ち男子が初めて頭首に冠を加へ大人の服を着て、成人となる儀式。

○春日の里。古今集「春日野の飛火の野守出でて見よ今幾日ありて若菜摘みてむ」などある、春日野
の附近にある里。○しるよしして。領縁^{しるよし}して。知行のある縁故にて。「して」は「たて」の意。○狩。

鷹狩のこと、即ち鷹を使つて鳥を捕へさせる狩。○なまめき。若く美しいこと、しなやかなこと。「なま」は、物の十分に熟さないのをいふ。○かいまみ。「垣間見」で、垣の間からのぞくこと、轉じてひそかにのぞき見ること。○ふるさと。舊き都。奈良の都をさす。古今集「ふるさととなりにし奈良の都にも色は變らず花は咲きけり」○はしたなく。どつち着かず寄邊のない意。つきのわるいこと、間のわるいこと、不都合なことなどにいふ。爰は、媚しい女性のあるのが、荒廢した舊都には不似合であるをいふ。○こゝちまどひにけり。心の亂れたこと。○狩衣。もと狩獵の時に用ゐた服、關腋で袖口に括緒があり、その緒を手首で締めくくるやうに作つてある。その形が襖に似てゐるから、狩襖ともいふ。後には太上天皇以下六位までの常服となつた。○信夫摺り。信夫郡から出た摺絹。「信夫」は陸奥の地名。顯昭の説に、陸奥國信夫郡に、もぢずりとて、髪を亂したやうに摺つたのを、信夫ずりと云ふのだと。又一説に、「陸奥の信夫の里に大なる石あり、此石に何とも見えぬ色々の紋あり、山藍といふものをもて石に塗り、其上に紙にても布にても摺りつくるをいふ」とあるは、偽言である。又垣衣草しのぶぐさの形を紫の色で摺つたのをいふともある。○春日野の。春日の里に居る女であるから、それをその土地の「紫草」に譬へ、且は男の着てゐる狩衣が紫色に摺つてある所から、「春日野の若紫の摺衣」と言ひつけ、さて男の心の亂れを信夫摺の模様の亂れによせたもの。一首の意は、若く美しい貴女を見、私の心は、信夫摺りの模様のやうにひどく亂れて、際限もない。「しのぶのは「亂れ」と言は

ん爲の譬喩。○おひつきて。「追ひ付きて」で、「やがて」の意。○ついで。事のついで。○陸奥の。「みちのくのしのぶもぢずり」は、「亂れ」の序。一首の意は、陸奥の信夫郡から出る振摺の模様の亂れのやうに、今私の心は亂れてゐる事であるが、それは貴女以外の誰の爲めに亂れ初めたのではない、全く貴女故に亂れそめた私である。「もぢずり」は、摺り模様の筋目の亂れて正しくないのをいふ。「なく」は、打消の助動詞「ぬ」の延音。此歌は河原左大臣融公の作で古今集戀の部に出てゐる。○いちはやき。猛く烈しい意。爰は、率爾な、さしあたつてのなどいふ意。○みやび。宮風で、都の手ぶりをいひ、凡て風流なこと、上品なことにいふ。

【通釋】

昔男があつた。元服をして、奈良の都、即ち春日の里に、領地のある縁で狩に出掛けた。その土地に大層若く美しい女の姉妹が住んでゐた。それをかの男が垣の隙間からひそかにのぞき見た。意外にも、荒廢した舊都には不似合な程の美人であつたから、心が亂れた。男は着てゐた狩衣の裾を切つて、それに歌を書いてやつた。それはしのぶ摺りの狩衣であつた。

春日野の若紫のすりごろもしのぶの亂れ限り知られず。

と、すぐさま詠んでやつた。事のついでが面白いと思つたであらうか。その歌は、

陸奥のしのぶもぢずり誰ゆゑに亂れそめにしわれならなくに。

【餘録】

といふ歌の心持である。昔の人はかうした卒爾な風流をした事だ。

「昔男ありけり」此發端の句は此物語が作物語である所から、時代を明かに示さずに、漠然と言うたもの。落窪物語には「今は昔」源氏物語には「何れの御時にか」などあるのと同じで、物語文の冒頭に置いたきまり文句である。萬葉集卷十六「有由縁歌」は、其序詞が、「昔者有娘子」とか、「昔者有壯士與美女也云々」又は、「昔者有壯士新成婚禮也云々」といふ句で始まつてゐる。此物語の冒頭も萬葉の「有由縁歌」から影響を多分に受けてゐる。

第一段に「初冠」の事を記した。之は此物語を「昔男」によつて代表されてゐる一人の男の一代記のやうに見せかける爲めで、最終の段には業平の辭世の歌と見てもよいものを置いて、首尾の一貫したものにしてゐる。當時は元服と共に結婚生活に入つたもので、光源氏は元服の夜左大臣の女葵上を添臥にした。古都でのいちはやき風流も初冠してから後であつてこそ順序が立つ。此物語は戀愛生活を中心としたものであるから、一人前の男になつた初冠に筆を起してゐるのである。

當時は歌を人に贈る場合に、本草の花の枝につけてやつたもので、多くの場合、その本草に縁のある歌をよむのが習はしになつてゐた。即ち表面は本草についての叙情で、裏面に自分の心持をほのめかすのである。信夫摺りの狩衣の裾を切つてやつたのも、裁り端に歌を直接書いたのではなく、花の

枝のかはりに、その切れ端に結びつけたのであらう。そして信夫模様に寄せて歌を詠んだのである。

上代の人は、山藍や月草などで種々の形を白帛に摺りつけた、所謂摺衣すりころもをいたく賞美して、男女共に之を着たものである。「月草に衣ぞ染むる君がため色どり衣摺らんと思ひて」(萬葉)など、摺衣を讀んだ歌が多い。「草枕旅ゆく君と知らませば岸の塙生はたふに匂はさましを」(同上)とあるは、住吉の海邊にある黄土きつに衣を摺つて染めるので、古事記には「丹摺袖」などいふ語もある。「古にありけむ人の覚めつゝ衣に摺りけむ眞野の榛原はりはら」とあるは、榛木で摺つたのである。山藍で摺つたものを「青摺」といひ、紫草の根で摺つたものを、「根摺」「紫摺」などと言つた。摺模様の上では遠山摺・小松摺・若竹摺・しのぶ摺などいふがあり、大海の模様を摺つたものもある。又、白い絹に物の形を縹色で摺り染めた、「地摺」などいふ名もある。貞丈雜記には「摺衣のこと、信夫振摺・花摺衣などと歌にもよめり。之は板に草木花鳥などの形を刻みて、ひめ糊を布に包みて、その木形の上を打ちて糊を付くるは、絹布の亡り動かぬ爲也。糊をあさく」と付け置きて、其上に布又は絹などをかけてよく押付くれば、木形の所高くなる也。それを藍の葉又は色々の花を銘々に布に包みて布絹などの面を摺れば、木草花鳥の繪あらはるゝ也」とある。

萬葉時代には摺衣を着た夢を見るのは、人の噂の多い前兆だといふやうな考もあつた。「摺衣け着りと夢見つ現うつつには誰たれしの人の言か繁はげけむ」などと詠んでゐる。

【二】 段

昔、男ありけり。奈良のみやこは離れ、このみやこは、人の家まだ定まらざりける時に西の京に女ありけり。その女世の人にはまされりけり。かたちよりは心なむまさりたりける。ひとりのみにもあらざりけらし。それをかのまめ男うちものかたらひて、歸りきて、いかゞ思ひけむ、時はやよひのついたち、雨そぼふるにやりける。

おきもせずねもせでよるを明しては春のものとて眺めくらしつ。

【語釋】

○かたち。容貌。○ひとりのみにも云々。獨身でもなかつたらしい。その女の許に通ふ男の他にあるをいふ。○まめ男。眞實のある男。實貞な男。○うちものかたらひて。手なづけて。○かへりきて。女に逢うた翌朝家に歸つて來て。此句の次に「其後」といふ句を補うて解く。古註には「二月晦日の夜あひて、ついたちの暮につかはすか」とあるが、歌の意味から考へると、女に逢うて翌朝家に歸つた其日に遣はすものとしては、歌の意味がそぐはない。その時よりも後の日の事でなくてはならない。○やよひ。三月の異名。○ついたち。月立で、廣くは月の初旬、狭くは一日の日をいふ。○そぼふる。

靜かに降ること。しよぼ／＼降ること。○おきもせず。起き上るのでもない、眠るでもない、物思ひの爲に輾轉反側して夜を明かしては、又、折から降る長雨ながあめを春の季節のものとして、それを眺めつゝ物思ひに目を暮してゐる事だ。「ながめ」に、「長雨」と「眺め」との兩意を兼ねて詠んだもの。「眺め」は、物をながく見つめることで、物思ひのある時、空をぼんやりと見つめてゐるをいふ。

【道釋】

昔男があつた。奈良の都から遷つて、此平安の都は家並も出來揃はなかつた時に、西の京に女が住んでゐた。その女は世間の女よりも勝れてゐた。容貌よりは氣立てが特によかつた。他に通うて來る男があつたらしい。その女をかの律義男が手なづけて、さて翌朝家に歸つて來てから數日經つて、どう考へたのか、時は三月の初旬、春雨のしよぼ／＼と降る日に、女の許に詠んでやつた歌。

おきもせずねもせでよるを明しては春のものとて眺めくらしつ。

【餘錄】

桓武帝の延暦三年十一月、奈良の都から山城國乙訓郡長岡の地に遷り、同十三年十月、更に今の京都の土地に遷られた。この平安京は賀茂・桂・二川の間に位し、朱雀大路によつて左京（東の京）と右京（西の京）とに別れてゐる。「この京は人の家まださだまらざりける時」とあるは、遷都後まだ間もない時期をさすので、特にかうした文句を用ひたのは、臆斷に言ふが如く、「起きもせず云々」の

歌が業平の歌である所から、わざと時代に錯誤を附し、業平でないやうに装ふ爲であつたのかも知れない。然し遷都後僅かに四十八年を経過した、仁明天皇の承和九年の西京にしのいのちのかき司の上言によると、早くも百姓が皆東に移つて西の京の荒寥に歸した趣が見えてゐる。以後荒廢は益々甚しく、慶滋保胤の池亭記には「予二十餘年以來、歴見東西二京、西京人家漸稀、殆幾幽墟きゆうきよ矣、人者有去無來、屋者有壞無造、其無處移徙しつて無憚を貧賤者是居、或樂幽隱已命、當入山歸西者不レ去、若レ自蓄財貨、有レ心奔營者、雖一日不レ得住之」とある。此記は遷都後百八十八年、圓融帝天元五年の作である。枕草子にも「西の京といふ所の荒れなりつる事、……垣ども皆やぶれて苔生ひて」ともある。だから業平の時代にも既に、西の京は住む人も少く、家並も荒廢して寂寥たるものであつたらうと思はれる。

「その女世の人にはまされけり。かたちよりは心なむまさりたりける」とあるは、まづ概括的に言つて、更に繰返して精細に叙述する文體で、當時の文章に盛んに用ひられた技巧である。心のまさつてゐるといふは、貞操のある賢明な心といふではなく、心ばへ、氣立てなどの意であらう。敏感な氣の利いた情けを知つてゐる心が、男の心を惹き付けたもので、殊に男をまめ男まめおとこといつてゐるのは、女の有つ魅力の強さを示したものである。

この歌は、古今集には「彌生のついたちより、忍びに人に物をいひて後に、雨のそぼふりけるによ

みてつかはしける。「在原業平朝臣」として載つてゐる。終日終夜、戀々の情やるせなく、春雨の空に逢へぬ戀を歎じたものである。それが此物語では、心持の異なつたものになつてゐる。逢へぬ嘆きでなく、逢うた後の悩みである。愛する女に他に男のあるのを知つた苛立たしい悩みである。格別の魅惑を感じた律義者の、純眞な一本氣の心の悶えである。それが春のしめやかな哀愁を背景としていよ／＼哀れが深い。

【三 段】

昔、男ありけり。けさうしける女のもとに、ひじき藻といふものをやるとて、

思ひあらば^{むいも}律の宿に寝もしなむひじきものには袖をしつゝも。

(二條の後のまだみかどにもつかうまつり給はで、ただ人にておはしける時のことなり。)

【語釋】

○けさう。懸想で、思ひをかけること。○ひじき藻。海藻の名。今の「ひじき」に同じ。和名抄「鹿尾菜、和名、比須木毛」とある。○思ひあらば。貴女に私を思ふ熱意があるならば、たとひ律の生えてゐる荒れ果てた家になりと、共に寝ませう、然るに貴女には私に對する愛情がないから、私は引き

敷く物には自分の袖をして、寂しく獨寢をしてゐる事です。「袖をしつゝ」は、袖を片敷く意、獨り丸寢をすること。「葎の宿」は、荒れてゐる家、葎は雜草の名。「ひじきもの」は、引敷く物で、それに「鹿尾菜」を言ひかけてある。○二條の後云々。後人の加註である。

【通釋】

昔、男があつた。思ひをかけた女の許へ、鹿尾菜といふ物を贈るとして、それに附けて讀んでやつた歌。

思ひあらば葎の宿にねもしなむひじきものには袖をしつゝも。

【餘錄】

歌はもと／＼鹿尾菜の名を隠してある、「物名」の歌である。それに端詞をつけて人に物を贈る時の歌、然もそれに托して自分の衷情を訴へたものにしてゐる。「けさうしける女のもとに」とだけ言つて、その女との關係がどの程度のものかは、歌で想像させてゐる。歌には逢へぬ戀を嘆く心が切實に現はれてゐる。高尙は「思ひあらば」を、「思ひなくば」に改め、懸想しても女のつれなく、兎や角物思ひするにうんじて、つら／＼思ふには、此苦しき思ひのなくば、君がかくつれなくて、獨袖をかたしきつゝ、いぶせき葎の宿にねても堪へられなを、苦しき思ひのある故に、獨寢の堪へ難きといふ心也」といひ、臆斷は、「思ひあらば」といふ句をとつて、「かばかり堪へ難き思ひあらば玉の臺も

甲斐なし、葦生ひたる宿に敷物なくて、袖を引敷物にして諸共にこそ寝めとよめるか。思あらばとは例の業平の心餘りて詞足らぬ也」と解き、「玉しける家も何せん八重葦生ひたる小屋も妹としすまは」(萬葉)の歌を引いてゐる。又、古意には、「君と我相思ふならば、如何なる葦生ひてわびしげならん宿にも共寝せん、引敷かん物には袖をしつゝもとなり」とある。昔男女共に寝る時は、夜の衣を脱いで、二人の衣の袖をさし交して着て寝たもので、「白妙の袖さし易へて靡き寝し」「白妙の袖さし易へてさ寝し夜や常にありける」「敷妙の袖易へし君玉だれの越野に過ぎぬ又もあはめやも」(萬葉集)など詠んでゐる。袖を敷いて寝るといふのは、丸寝する時の事、歌にも「吾が戀ふる妹は逢はさず玉の浦に衣片敷き獨かも寝む」「初瀬風斯く吹く夜半を何時迄か衣かたしき吾れ獨寝む」(萬葉)などある。「衣片敷く」は「袖かたしく」と同じだ。男女が相逢うて起き別れる朝を「後朝きんね」といふも、一つに打重ねて着て寝た着物を、別々に着て別れるからの事で、男女が共に寝るのをば袖を敷いてねるとは言はない。だから臆斷や古意の説は承けられない。想ふに上句と下句とはそのまゝつらなつてゐるのではなく、意味が切れてゐるので、「袖をしつゝも」と詠嘆してゐるのは、女に自分を思ふ情がないので、獨り丸寝をして淋しく寝る事だと歎いたのである。

「葦の宿」は、「淺茅生の宿」「蓬生の宿」などいふと同じく、荒れた宿の形容である。源氏物語にも荒れた家のさまを叙して、「草も高くなり、野分にいとゞあれたる心ちして、月影ばかりぞ八重葦にも

さはらずさし入りたる」などとある。

【四 段】

昔、ひんがしの五條に、おほきさいの宮おはしましける西の對^{たい}に、すむ人ありけり。それをほいにはあらでゆきとぶらふ人、志深かりけるを、む月の十日あまりほかに隠れにけり。ありどころは聞けど、人のいき通ふべき所にもあらざりければ、なほうしと思ひつゝなむありける。又の年のむ月に、梅の花ざかりに、こぞを思ひ出でてかの西の對にいきて、たちて見るて見、見れど、去年に似るべくもあらず、うち泣きて、あばらなる板敷に、月のかたぶくまで臥せりて、こぞを戀ひてよめる。

月やあらぬ春や昔の春ならぬ我が身一つはもとの身にして、
とよみて、夜のほのくくと明くるに、なくくかへりにけり。

【語釋】

○おほきさいの宮。皇太后宮。昔は天皇の妻妾を凡て「きさき」といひ、その中の第一の嫡妻を「お

ほきさき」と言つたものであるが、後世は正妻の方を「きさき」皇太后を「おほきさき」と言つた。爰にいふ皇太后宮は、仁明帝の皇后、五條の後のこと。○西の對。西の對屋。○ほいにはあらで、前から心に思つてゐたのではなくて。「ほい」は本意の字音で、かねて思つてゐる意。○ゆきとぶらぶ人。懇ろに訪ねゆく人。「とぶらぶ」は、安否を問ふこと、見舞ふこと。○む月。陰曆一月の異名。○ほかに隠れにけり。男が足繁く通ふので世間の評判を憚つて居所をかへたのである。○あばらなるいたじき。戸障子などのない荒れはてた板敷。家の端の方の板敷であらう。○月やあらぬ。月は去年の月ではないか、去年通りの月だ、眼前の春景色は昔のまゝの春景色ではないか、昔のまゝの眺めである、然るに我身だけは元の身であつて、然も身の境遇は變りはてゝゐる事だ。「や」は二つとも反語。○ほのぼのと。ほんのりと。かすかに。○なくく。泣きながら。

【通釋】

昔、東の京の五條に、皇太后宮がお出でになつた。その御殿の西の對屋に住んでゐる女があつた。その女を、初めから思つてゐたのではなく、何かの序にいゝ仲となつて、訪ねて行つてゐる男が、情愛が深かつ　然るに正月の十日過ぎ頃、女は他所へ移つて終つた。居る所は聞いてゐるが、通うてゆく事の　來る場所でもなかつた。それが爲に男はつらい思ひをして月日を送つてゐた。翌年の正月梅の花盛りの時に、去年の事をなつかしく思ひ出して、かの西の對屋に行つて、起つては見、居ては